

# 活動報告書

報告者氏名： 日置 晋平 所属： 大阪府立東大阪支援学校 記録日：2015年2月24日

## 【対象児の情報】

[学年] 小学2年生

## 【障害と困難の内容】

学習障害 読みに困難があり、代読などの支援が必要

- ①言葉、文をまとまりでとらえられず、音読すると文の終わりを自分なりの解釈で読み変えることがある。
- ②音読に対する苦手意識がある。
- ③眼球運動が苦手で、眼球の向く方向に顔も一緒に動いてしまう。

## 【活動報告】

・当初のねらい（計画書の学習目標）と活動による変化

- (1) 読字のサポートで授業内容を理解できる。
- (2) 言葉、文を読む支援を行うことで、学習内容の理解や意欲を高める。
- (3) 通常の学級での国語の授業の中で、読字の支援があれば、内容が理解できる。

・ 実施期間 2014年6月9日～2015年2月下旬

・ 実施者 日置晋平

・ 実施者と対象児の関係

日置 晋平 当研究の研究者 地域支援リーディングスタッフとして対象児に関わっている。対象児、保護者、共同研究者の希望や意見をまとめ、研究の方向を調整する。また、iPad等の設定、指導内容や教材の提案などを行っている。

梅井 遥 対象児童の支援学級担任。今年初めて支援学級の担任となった。対象児への指導を主に担当している。

小島 美和 対象児童の学校に設置されている小学校の通級指導教室担任。この研究を行うにあたり、共に計画をしたり、梅井への助言を行ったりしている。

## 【活動内容と対象児の変化】

### 対象児の事前の状況

小学校入学時には特別な情報はなく入学してきたが、学習の読み書きの場面での困難さ、手先の不器用さなどが目立つようになってきた。入学して間もなく、医療機関にて視知覚からによる学習障害との診断が下り、1年生時の5月下旬より通級指導教室に通うこととなった。2年生への進学時に支援学級への在籍となった。

WISC-IVの結果からは、FSIQ、VCI、WMI、が平均の範囲内だが、PRIは平均から平均の下の範囲の結果であった。下位検査の課題ごとに得意不得意のばらつきが大きく、得意不得意の差は大きいと考えられる。聴覚情報を短期記憶しておくことは得意だが、形を見分けたり、単純作業を素早く行ったりすることは苦手との結果が出ている。

対象児は語彙をよく身に付けており、相手の説明や質問を正しく理解することや、自分の考えや気持ちを相手に伝えるように表現することができる。日常生活の中で自然と獲得するような知識をよく身につけていることから、日頃の学習や経験を積むことで力を伸ばしていくことかできると考えられる。フロスティック視知覚検査では知覚指数はWISC-IVより低い結果が出ている。認知と処理に関する検査の中では、図形と素地の結果が最も低く、3歳4ヶ月程度の評価であった。目の手の協応は苦手と検査の中から伺えるので、そのことにも何らかの手だてが必要である。

下位検査の課題ごとの得意不得意のばらつきから、「これくらいわかるだろう。」「このくらいできるだろう。」ということが実際には苦手なことだった、ということがありえるので、指導や支援を行なっていく中で対象児の反応や様子をしっかりと見ながら適切な指導や支援を選んでいく必要がある。

本児は通常の学級で友だちと一緒に学びたい気持ちが強い。その気持ちに応えるために通常の学級で一緒に学習できるための支援や、基礎的環境整備を計画し、行っていく必要がある。

## 活動の具体的内容

### 6月～9月まで（前期）

取り組みスタート。まずはiPadを使うのは支援学級のみとした。Voice of DAISYを使った読みを中心に支援を行った。この期間の取り組みでAさんはVoice of DAISYによる読み上げで文章を理解できることを実感でき、少しずつ自信をつけていくことができた。



7月3日（木）対象児の通級する学級の児童にむけて、共同研究者の小島、梅井が対象児の障害についての理解をクラスの子どもたちに広げるための授業を行った。子どもたちは一生懸命聞いていた。対象児の特性を知ってもらえ、クラスでの理解が広がった。iPadで「Voice of DAISY」を使っている様子を紹介すると、一部から「いいなあ。」や「僕も使いたい。」などの声があがった。本人がデジタイズを使い、教科書を読む場面が子どもたちには強く印象に残っている様子だった。

8月の下旬に対象児が通う小学校、進路先となる中学校などが集まった研修会で、日置がiPadに関する研修を受け持った。その中で、障がいのある子どもたちが教室でiPadを使用することで、他の友だちと一緒に勉強できる例などを紹介し、理解を得られるように説明した。途中でアンケートを取りながら研修を進めていく中で、受講したほとんどの先生が初めは教室で特定の子がiPadを使用することに反対していた。しかし研修を進める中で理解が広がり、研修の終わりころには半分以上の先生の理解が得られた。このような研修を今後も受け持つことで、対象児やその他の支援が必要な子どもたちが、iPadなどの機器を継続して使用できるように環境整備を行っていく必要がある。

### 10月～（後期スタート）

Aさんの通常の学級にiPadを持ち込んで一緒に授業を受けることの計画を始めた。前後期制であること、行事の取り組み等から落ち着かない状況等为避免、10月中旬頃より教室に持ち込むことを始めた。教室での授業に向けて予習や準備を行ってから取り組むことで、スムーズに参加することができた。教室に持ち込むには初めは少し緊張もあった。しかし共同研究者の梅井の支援を受けながら教室でもVoice of DAISYの読み上げ機能を使って教科書を理解し、友だちと一緒に授業を受けることができた。また質問に対して発言することもできている。



教室では支援を受けながらも、自分で出来ることは自分でするようにしている。

## 11月～12月

11月にあった日曜参観でもiPadを教室に持ち込み、一緒に授業を受けた。他の友だちが国語の一文読みをしている時間に、Voice of DAISYの読み上げをヘッドフォンで聴き、内容を理解できた。予習した内容を共同研究者の梅井と確認しながらワークシートを仕上げることもできている。11月下旬頃になると、予習する時間があまり取れなかった時でも、ワークシートの答えを本文から探そうとがんばり、答えを見つけ出すことができた。教室での使用にも慣れ、学習への意欲も高まっている。支援を受けながらの使用だが、自分でも操作する場面が増えてきている。DAISYの画面で拡大などのピンチアウトやドラッグなども、自分の思うように操ることができている。

## 1月（最近の様子）

1月の終わりに「かさこじぞう」のテストを行った。Voice of DAISYを使って物語文の読み上げを聞いてテストを受けることができた。問題文の一部が理解できないことがあったが、補足で説明すると解答することができた。

年間を通して取り組みを行っている中で、配布されたプリントなどでの学習に関しては、事前に支援学級での予習をすることで対応してきた。本人が時間をかけてじっくり読む時間が確保できている。他には代読の支援などを行ってきた。今後はプリントを読み上げるアプリの導入や、事前に授業で使用するプリントなどを入手して、読み上げられるようにしておく支援なども計画する必要がある。

## 対象児の事後の変化

iPadのVoice of DAISYでの教科書の読み上げを国語の時間を中心に使用していくことで、教科書の内容を理解できるようになった。通常の学級での国語の授業を受けることが増え、それが自信にもつながったと感じられる。そのことから授業参観でもiPadを使用して、友だちと一緒に授業を受けることができたのではと考えられる。また1月のテストでの使用もできたことから、今後のテストでの活用など、より幅広い場面での使用を計画していくことができるようになった。

## 【報告者の気づきとエビデンス】

### 主観的気づき

Aさんに初めて出会った時の印象は、視ること、理解すること等に対して常に工夫をしながら生活している子ども、であった。そのため色々な取り組みの中で、他の子どもよりも負担が大きく感じているような素振りや表情が感じられることがあった。その様子から、様々な場面でそれらの負担を軽減していく支援が必要と感じた。

Voice of DAISYを使った読みの支援で、教科書などの理解の困難さは大きく解消された。それは「読む」というインプットの面での支援があれば本来の能力を発揮できるということである。Aさんは聞いたことへの理解は速く、Voice of DAISYの読み上げでも一度聞いただけでほとんどの内容が理解できている。そのことからVoice of DAISYの使用によって、質問に答えることができるのであろうと考えられる。

### エビデンス（具体的数値など）

#### URAWSS 結果

- ①書き課題（有意味文） 1分間の書字速度12.333… 字で、評価A
  - ②書き課題（無意味文） 1分間の書字速度15.666… 字で、評価A
  - ③読み速度 1分間の読み速度102字で、評価C
- 内容理解 6問中6問正解

URAWSSの結果から読み上げ機能等を使用していくのが相応しい児童である。

#### ・ その他エピソード

##### 現在の教室や学校の様子（Aさんを取りまく環境）

AさんはiPadを持ち込むにあたり、「友だちに何か言われへんかな・・・。」などの心配があったようだが、特に問題となることは起きていない。「それはAさんの教科書のかわりなんやで。」など、友だちからAさんがiPadを使用することに理解を示している発言もあった。クラスの子どもたちは興味を持ちつつも、iPadを使用することに否定的な発言は無く、自然に受け入れている様子が感じられた。小学校全体でこの取り組みに関して周知と理解があるため、落ち着いて取り組んでいる。

今回の取り組みはAさん自身の「通常の学級でみんなと一緒に勉強したい。」の思いから始まった。本人の努力はもちろんあったが、周りの理解や支援の輪を広げられたことから、Aさんの思いを実現することができたと考えられる。

1月頃に、Aさんより「書くのがしんどい。」という訴えがあった。URAWSSの書き問題は有意味文、無意味文ともに評価はAだったが、Aさん自身の感じるしんどさに対して、今後より詳細なアセスメント等と、書きのしんどさを改善する支援を行っていく必要が出てきた。他にも音韻操作の苦手さへの支援など、今後もAさんへの支援は継続して続けていく必要がある。

##### 今後に向けて

- ①通常の学級でのiPadの活用を増やす中で、「できる」実感をより多く感じる経験を積み、自信につなげる。
- ②音韻操作の困難さについての検討を行い、支援を行っていく。
- ③自分でできることを増やし、支援の手を減らしていけるようにする。
- ④読み上げ機能を使った読書の経験を増やし、より豊かな心を育むとともに、豊富な語彙力を身につける。
- ⑤取り組み内容を個別の支援計画や指導計画に反映させ、継続的に取り組んでいく。
- ⑥将来に向けて、進学や受験の際に配慮が受けられるように使用実績を積んでいく。
- ⑦対象児がiPadを使う必要性の理解を、友だちや教員へより広げていくために今後も啓発していく。
- ⑧プリントなどの読み上げのアプリの導入など、他の紙媒体に対する支援も検討していく。
- ⑨書きのしんどさの訴えに対しての手立てや支援を行っていく。

## この取り組みを一緒に取り組んだAさんと先生方からのコメント

iPadは声も出るし、教科書を読んでくれるので分かりやすいです。最初、クラスにiPadを持っていくのが不安だったけど、大丈夫になった。みんなと授業することができて、嬉しかった。

対象児童 Aさん

今回のプロジェクトはAさん本人、保護者、そして周りの先生方の力がなければできなかったことだと思っています。教室にiPadを持ち込めるようになったのは、とても大きな成果だと考えています。iPadがあることでできることが増えて、本人の自信が深まっていく姿は、何よりもうれしいことでした。

共同研究者 梅井 遥（支援学級担任）

昨年度、この児童と通級指導教室で学習する中で、テイジー教科書の必要性を強く感じたため今年度より使用する手続きをとった頃にこのプロジェクトを知り、地域支援をお願いしました。通常の学級に持ち込んで周りの子どもたちにも認めてもらえるようになるなど成長できたのは、このプロジェクトのおかげです。まだまだ、音韻操作や注意の面でたくさんの課題が残っていますが、この1年間のことを生かし、支援していきたいと思っています。ありがとうございました。

共同研究者 小島 美和（通級指導教室担当者）

今回の研究を進めていただくにあたって、まずクラスの子どもたちに向けてAさんへの理解を深める授業を支援学級の先生方が行って下さいました。その授業でクラスの子どもたちは、Aさんの支援学級での様子や、見えにくさについて知り、AさんにとってiPadがとても大切な手助けになっていることを知りました。困難を抱えたAさんが、iPadを手に自信を持って発表する姿を見て、クラスの子どもたちも自分なりの方法で頑張ることの大切さを知る素晴らしい機会になりました。

K先生（Aさんの通常の学級の担任）